

西水 美恵子

にしみず・みえこ＝75年ジョンズ・ホプキンス大学院卒、プリンストン大経済学助教授を経て、世銀副総裁。退任後、シンクタンク・ソフィアバンクのパートナーなどを務める。



山形県庄内にある東北公益文科大学（1月13日付本稿参照）から客員教授への招待を受け

たものの、何を教えたなら役に立つのか考え込んでしまった。長年、途上国の構造調整改革や金融改革に携わった経験はある。が、そういう分野で大活躍をされてきた黒田昌裕学長や竹中平蔵客員教授など、錚々たる方が教壇に立たれている。考えあぐねた末、まず「現場」を見てからと、羽田を飛回すと、出羽富士とも呼ばれる鳥海山が、視界に入ってきた。北に秋田県、西に日本海を控え、庄内平野を凜と見下ろすその美形に、江戸末期頃の地を慈しみ、近代経済史にさえ稀な財政・構造改革を

ウェーブ

2010. 2. 15

時評

庄内人の魂ふたたび

主導した3人のリーダーを連想した。酒田の豪商本間光丘。光丘の才覚と財力を改革に起用した2人の名君、庄内藩主酒井忠徳と米沢藩主上杉治憲。窮乏に喘ぐ藩財政を立て直し、持続的な成長に繋げる長期構造改革を成し遂げた。

ふと、高校時代に日本史で教わったことを思い出した。この3人は、まるで申し合わせたように秀

2日間のゼミの1日目は、学生一人ずつが5分間のスピーチ。その後お互いの批評や自分の反省を率直に話し合い、パワー・スピーチの技法を学ぶ。2日目は、初日の学習を反映して手直したスピーチをもう一度。その後、2日間

で何を学んだかを話し合う。至極簡単なゼミだが、かなめはスピーチのテーマにある。「自分が心の

る姿勢、即ち「本物のリーダーたる根本条件」だ。パワー・スピーチに挑めば、人間誰にでもあるリーダーシップ精神が開花されるはずだと考えた。しかし、ゼミの前例やモデルなど何もない。大いに不安だった。

参加した6人の大学院生は、その不安をもの見事に吹き飛ばしてくれた。子供のころから舞台上

一人一人、心の奥底にあった信念に真っ正面から向き合ってくれた。人前で自分を丸裸にする勇気が、その信念を静寂な存在感のある情熱に変えた。話しながら流れ出す涙に本人が驚き、それでも語り続けるスピーチに、耳と心を傾ける者も泣いた。ある学生は、選んだテーマが心底訴えたいことではなかったと気付き悩んだ過程そのものを語り、大喝采を受けた。

「人間って、たった1日でこれほど変わるものか」と、ゼミを傍聴された黒田学長が驚かれた。一人の学生が言った。「借り物のパーソナリティを脱却することを、

でたコミュニケーション能力の持ち主だったと。各々、自分に真っ

底から訴えたいことをテーマに」と、学生に伝えた。

上がる狂言のこと。人を助け社会を変えるNPO活動のこと。亭主

人から実感していきたい」。日本史上数々の本物リーダーを

正直で、民を信じるからこそ煽り騙さない、本物のリーダーたる根本条件を備えていたのだろう。

本稿にも昨年（2月4日）綴ったが、パワー・スピーチの技法はいたって簡単だ。が、いくらテクニクを駆使しても、信じてもら

て、庄内の発展に繋げたい観光のことに。6人6様のテーマは、初日

育んだこの地。そこに在る庄内人の魂が、ふたたび脈打つと感じた2日間だった。「なぜは成る為

その途端、閃いた。立派な公益学を学んでも、人の心を動かさなければ世直しの仕事はできない。そうだ、パワー・スピーチのゼミ

をさせてもらおうと思いついた。に正直で、絶対無条件に人を信じ

には涙を誘うパワー・スピーチへと、完璧に生まれ変わった。

の為さぬなりけり」（上杉治憲）